図書館のよもやま話――「平成」から「令和」へ

加藤好郎

はじめに

明治期の日清・日露の勝利、大正ロマン、昭和期の国民の約320万人を失った戦争、平成の大震災、AI時代の到来、そして「令和」になり日本はどの方向に向かっていくのか。現代社会において多くの人は、日本が江戸時代の鎖国に戻ることは考えていないだろう。異文化コミュニケーションは大事なことと考え、農耕民族としての日本人、遊牧民族としての欧米人、人生観を大事にする日本人、死生観を考えさせる欧米人、それぞれの国が過去の歴史、価値観と文化を大事にし、その言動についても理解し合いお互いに発展することを考えているに違いない。日本もグローバルに発展していくことを考えているはずだが、個人的には、その方向性がはっきりと見えない気がする。

公共図書館は、1963年の「中小レポート」（中小都市における公共図書館の運営）で無料貸出サービスや図書予算について明確にし、高度経済成長期にともない、それ以来、図書館サービスは右肩あがりで成長してきた。しかし、現在では、図書の貸出しだけでは無料貸本屋であると揶揄されながら、課題解決支援も図書館の重要な役割であるとされている。リアル図書館から仮想図書館にシフトするという技術的なレベルもそうだが、本来の公共図書館の役割と存続の意味を考えてみる必要がある。地域住民の平和と幸福のために、今こそ令和の図書館ができることを具体的に実現することにある。

現代の学生および若者たちは、現代社会の過剰サービスに非常に慣れ親しんでいる。戦後間もない時代は、多くの人は、創意工夫し自らを高める努力をすることで一定の生活を保ってきた。現代は、サービスが良くなり、さらにそれが過剰になり、サービスされることが当たり前と無意識に捉えており、そのことに満足してしまっているのではないのか。レベルの低い大学になると、“学生さまは神様”のようである。当然、人間は楽なほうがいいに決まっているが、そのことに慣れすぎることで、現代人はめんどくさいことに対応することにも、避けたい、あるいは疲れてしまっているようにも見える。ギブミーチョコレートから始まった、米国の日本戦略、米国独自のサービス精神、教育の自由化、米国から

の押し付け民主主義が、日本人にとっては良いものとして受け止められてきたような気がする。最近、無差別殺人事件、所謂「拡大自殺」がある。理由はさまざまであるが、情報化社会のなかの孤独と疎外感もそのひとつの要因と考えられる。高齢者の自動車事故によって子どもが被害者になる痛ましい事件、「いじめ」による子どもの自殺、「介護」の疲れによる家族の自殺、「子どもへの虐待」による親の殺人等、それらの理由のひとつは、日々の暮らしの中で、他人との積極的な関りを避けること、子ども、家族以外とのコミュニケーションを避けることが考えられる。今、日本人古来の精神の尊さを、新渡戸稲造の『武士道』を通して確認してもいいのかもしれない。

公共図書館は、生涯教育の中心ともされている。図書館は本を貸出すだけではなく、社会における課題解決を支援することも重要な役割である。図書館および図書館員は、令和に向けて今までより他方面での活躍が期待される。“だけどだけど”で何にもやらないのではなく、とにかく動いてみる精神が求められている。令和時代の図書館政策のひとつは、図書館（員）相互のネットワークを拡充し、切磋琢磨して優秀な図書館員を育てることにある。

1．2020年“豊橋市まちなか図書館”（仮称）開館予定

愛知大学に就任した際、豊橋駅の側で“豊橋市まちなか図書館”（仮称）の整備基本計画の意見交換会に出席し、次のことを提案した。

豊橋市にはすでに市立図書館が存在するので、既存の図書館よりも、新しい発想における図書館建設に向けて、豊橋市民から多くの期待という意見を受け止めてください。「豊橋に日本一の図書館を」の新図書館計画の最大の魅力は、いわゆる The Library ではない発想である。それは、本、雑誌、新聞の貸出、閲覧サービスを中心にしている豊橋中央図書館とは異なる利用者サービスが実現できる期待感からである。そのことで、豊橋市民の新図書館に対するあつい気持ちが、さらに盛り上がっていくと考えられる。2019年度内に市に対して草案を提出するようで、その実現に対する要望はすべて出し尽くされているように見えるのだが、実際には、その方向性が未だ具体的にはなっていないように思える。要望、期待、希望、夢想。要は具体的にどのようにまとめるのか、だれに最終的な旗振りを委ねるのか、そして全員が同じ方向を向くことが必要である。水先案内人が多いと、むしろ不平と不安のグループが足を引っ張ることになる。新図書館のサービスの運用と内容については、既

存の図書館から一定の距離を置くことで新機軸ができる場合もある。市民の方々が望んでいるのは、豊橋に「いやしの館(コモンズ)」あるいは「最寄りの館（コモンズ)」を建設することのように思える。「館」に行けば、豊橋の方々とのコミュニケーションがはかれ、そこに来た人と「館」を通じて心のネットワークをつなぐことができ、さらに技術的なネットワークも解決できる、そんなイメージだと思われる。

つまり少子化・高齢化時代における、新図書館サービス構築について、図書館経験者としては、豊橋が成功に向かうために次のことを挙げた。①行政、企業とのリンケージ。②図書館友の会（仮称）の実現：市民が自分たちの誇りと、希望としての建設をする意味を持たせるため。③学生、ボランティアも参加できる図書館運用。④大学図書館との協力：教科書、学術書の共有化。⑤町づくり、町おこし。⑥郷土資料に関わる情報収集と情報提供活動：過去と現在の郷土の状況、特産物、地場産業、遺跡、名所旧跡、祭りや芸能。⑦解題解決支援として主題専門家へのつなぎの役割。⑧グーテンベルク42行聖書のような貴重書の購入やインキュナビュラの購入のノウハウ。⑨コンセルジュを新図書館に配置しての豊橋近辺の案内。⑩諮問委員会の設置。

以上を実現するためには、①優秀な図書館長（図書館経験者の意味ではない）の採用。②サービス方針の作成。③資金調達方法。④アンテナを高く張った情報収集。⑤市民への広報活動（行政、企業、学校、商店街と住宅地。豊橋以外の市民)。

豊橋の新図書館は、地方再生、地域再生にむけての、小さくて大きな挑戦である。

2．令和時代の“豊橋市まちなか図書館”（仮称）とは

基本理念：世界を広げ、まちづくりに繋げる“知と交流の創造拠点”。

基本方針：①新たな世界を発見し、創造する。②交流、活動を通して、人々が繋がる始点となる。③気軽に立ち寄れ、心落ち着く居場所となる。④再開発エリアや中心市街地の諸機能等と連携する。⑤次代のまちづくりと中心市街地のにぎわい創出に繋げる。

まちなか図書館（仮称）が目指すもの：①図書館の基本的な機能を押さえつつ、まちなかにこそ求められる機能を担う。②新たな情報や人との出会いを創出し、まちづくりに寄与する人材を育成する。③整備に向けて重視するポイント。④新たな利用者層を掘り起こす。⑤市民とともにつくる。⑥まちづくりに繋げる。⑦中心市街地の立地を生かす。⑧中央図書館と役割を分担し、連携を図る。

導入位置と施設規模：①豊橋駅前大通

二丁目地区第一種市街地再開発事業により再開発ビル東棟。②規模：4000平方メートル以内、2階の一部と3階、③目標利用者数年間50～70万人（豊橋市中央図書館利用者数：約40万人）。

基本方針に基づく特徴的サービス：①新たな世界を発見し、創造する（読者による本のおすすめ本の紹介、映像活動などの創作活動等）。②交流、活動を通して、人と人とが繋がる始点となる（趣味、健康などの参加型ワークショップ、法律、企業、就職、健康等に関する各種相談、ビブリオバトルの実施）。③気軽に立ち寄れ、心落ち着く居場所となる（カフェやラウンジなどでくつろげるスペースの提供）。④再開発エリアや中心市街地の諸機能等と連携する（書店、飲食店やこども未来館と連携した取り組み）。⑤次代のまちづくりと中心市街地のにぎわい創出に繋げる（専門家を招いた講演会やサイエンスカフェ等の開催）。

蔵書と管理運営：①開架を基本で約10万冊。② ICT を活用したサービス。③開館時間（案）：平日、休日とも9時～22時、休館日（案）：月1回。④駐車場・駐輪場整備準備。⑤概算事業費：約30億円。⑥開館予定：2020年8月。

実施計画概要版：豊橋市都市計画部まちなか図書館整備推進室、豊橋市教育委員会教育部図書館。

3．少子化・高齢化における図書館の役割

日本は、少子高齢化と人手不足が問題になっている。日本の戦後の人口は、1948年8320万人のうち、0歳～14歳が35.4％、15歳～64歳が59.7％、65歳以上が4.9％。1995年1億2557万人、0歳～14歳が16.0％、15歳～64歳が69.5％、65歳以上が14.5％。2015年1億2713万人のうち、0歳～14歳が12.7％、15歳～64歳が60.9％、65歳以上が26.4％である。15歳～64歳の働き盛りが、この20年間で、69.5％から60.9％に減少している。国別の子どもの割合を見てみると、タンザニア44.4％、インド30.8％と多いのだが、米国でも19.2％、英国は17.7％、中国は16.5％、ドイツが13.1％、そして日本が最低の12.6％である。他国との子ども数の比較を見ても、今後の人手不足は明らかで日本でも外国人の移民は増加していくであろう。

まず、絵本を通じた子育てについて紹介する。英国では1992年にブックスタートが開始した。Share Books with your baby である。英国のバーミンガム大学教育学部と公共図書館で協力した結果、“幼児は生後4か月で絵本に反応する”ことを発見し、赤ちゃんと保護者が豊かな言葉を交わしながら楽しいひと時をすごすこと、そしてその絵本も開拓することを始めた。日本では、2001年か

ら乳幼児とその保護者に対して、絵本をプレゼントするブックスタート・プロジェクトを始めた。図書館員、保健婦、子育て支援課、市民ボランティアがそのことを運営している。その内容は、読み聞かせ、母親の相談にのること、さらに絵本キッズを親御さんにプレゼントしている。現在943の自治体で実施している。

子育てに対して、次に高齢者に対する図書館の役割について紹介する。2007年『認知症の人のための図書館サービスガイドライン』（*Guidelines for Library Service to Persons with Dementia*）がヘレ・アンドルップ・モーテンセン、ギッダ・スカット・ニールセン共著で出版された。世界全体で認知症は、2010年2400万人、2040年8100万人といわれ、80歳以上の5人に1人にその影響を及ぼすと言われている。日本は2012年462万人、2025年には700万人と予想されている。米国の精神科医ロバート・バトラーによって提唱された、心理療法として開発されたのが、“回想法”である。“回想法”とは記憶を呼び起こすことを意味する。脳に刺激を与えて、認知症の予防や進行抑制につなげる心理療法である。図書館は、現在のものだけでなく過去の情報資源を維持管理している。図書館の文化、文学、情報にアクセスできる権利はすべての人に与えられる。人生の歴史や思い出に対して、聞き手が受容的・共感的に関わることで、認知症の予防や進行を抑制する効果が見込まれる。図書館員は、研修を受け認知症の方々を毎日受け入れることができるノウハウを持つことが必要である。

4．図書館の存在意義と公共図書館

Jean Key Gates 氏が *Introduction to Librarianship*（1968）で成熟している社会に図書館が発展する例として「図書館が成り立つための8つの社会的条件」を紹介している。①政治的・文化的な成熟度をもった社会。②個々人が文化的・知的活動を行っている社会。③知的創造活動・学術的活動が活発な社会。④一般市民の知的水準を重視する社会。⑤記録された資料に依拠する学習活動が重視される社会。⑥図書館利用を促進する文化的で知的関心の高い人が居住する社会。⑦経済的に繁栄していて社会貢献を行える余裕のある社会。⑧政治や経済が情報と知識の広範な利用に依存している社会。確かに、上記の8条件を満たす社会は、成熟した社会、すなわち社会の知的能力（社会能力）の高い社会では成り立つが、例えば、政治的・文化的・経済的・学習活動等が重視されていない社会に図書館が発展する必要はないのだろうか。図書館のデジタル化・情報化は勿論のことだが、ここでは図書館が存在するための本質を考えてみたい。

「国境なき図書館」を紹介する。被災地、難民キャンプ、文化と隔絶された場

所に「本」を届ける移動図書館である。難民キャンプに難民一人が滞在する年数は、平均17年と言われている。食料と衣類、寝る場所の確保が優先され、文化との接触がなく、子どもの成長あるいは人間としての尊厳が保てない場合が多い。インターネットの時代に、図書館の役割も大きく変わった。創設者のパトリック・ウェイユとデザイナーのフィリップ・スタルクは、“アイディア・ボックス”を創作した。“緑のボックス”には、インターネット用のパソコン、タブレット端末、GPS等のデジタル情報機器。“黄色のボックス”には、ネットとつながるのに必要なハードウエア。“オレンジのボックス”には、本250冊、ゲームと、DVD。“青のボックス”には、映画、ビデオ上映のための機器。映写機、発電機などを運搬し、総重量約800キロである。このNGOは地方自治体と協力しながら、アイディア・ボックスを低収入の住民が集まる地域などに設置して、活躍の場を広げている。

もう一つは、NHK BS世界のドキュメンタリー「戦場の秘密図書館」を紹介する。シリアのダマスカス近郊、反体制勢力の拠点の町ダラヤである。たる爆弾が日夜降り注ぐ中、若者ががれきの中から本を集め、廃墟の地下室にそれを集め、銃撃戦に明け暮れる戦闘員らが、休憩時間に訪れて手当たり次第に本をむさぼり読む。本から学び、そのことに従って、英語、哲学等を学び、議論する姿を見ながら、図書館の情報資源（本）の重要さを再確認すると同時に、恵まれた日本の環境において自分たちが幸せであることを再確認させられる。情報、教養を本から得ることの重要さを改めて確信できることである。

子どものいじめの問題と図書館の関係について述べる。2015年版内閣府「自殺対策白書」による過去42年の18歳までの子どもの日付別自殺数では、4月8日95人、4月11日99人、8月31日92人、9月1日131人、9月2日94人である。米国の公共図書館のポスターには“To the library once want to commit suicide”とある。3年前に鎌倉市図書館のツイートで“もうすぐ2学期。学校が始まるのが死ぬほどつらい子は、学校を休んで図書館へいらっしゃい。マンガもライトノベルもあるよ。一日いても誰も何も言わないよ。9月から学校へ行くくらいなら死んじゃおうと思ったら、逃げ場所に図書館も思い出してね”が出された。多くの反響があった。さらに上野動物園も“学校に行きたくないと思い悩んでいるみなさんへ。アメリカバクは敵から逃げる時は、一目散に水の中に飛び込みます。逃げる時に誰かの許可はいりません。脇目も振らず逃げてください。もし逃げ場所がなければ、動物園にいらっしゃい。人間社会なんぞに縛られないたくさんの生物があなたを待っていますか

ら”。自殺者がここ数年3万人から2万8千人くらいに少なくなったが、子どもの自殺は減っていない。

図書館（員）だけでなく、地域の中心的なサービス施設として、いじめ問題、子どもの貧困等を防ぐために、公共図書館の在り方（存在意義）を考える必要がある。

5．令和における公共図書館の費用対効果と費用対便益

平成時代をまとめてみると、平成は「疾風怒涛の時代」であったと言われている。消え去った企業もあるが、一方、独自の経営戦略やイノベーションを牽引した多くの経営者も生まれてきた。「令和」の時代はそれを引き継ぎ、さらに発展させる経営者が現れることも十分に期待できる。令和時代になり、すぐに解決に向けて、取りかからなければならないことは、少子化問題、非常勤問題、災害問題、地域創生、そして個人的な実感としては、大学教育改革（学生教育改革）、年金問題があげられる。同時に、公共図書館の財政問題、経営である。

ここで公共図書館の指定管理者制度について触れておく。PFIにより指定管理者制度が導入され、2017年現在約3300の公共図書館のうち、530（特別区112、政令市58、市299、町村61）図書館が指定管理になっている。このことは、今後増加する傾向にあるが、賛否両論であることも確かである。地方自治体の予算により、民間の経済的支援と管理運営の導入によってであるが、図書館のサービスの向上も賛否あるようだ。指定管理者制度は、公民館、博物館、文化会館も同様であり、図書館は、一般法人15％、企業64.3％、NPO法人12.7％である。因みに、公民館は、一般法人21.4％、企業4.7％、NPO法人2.2％である。博物館は、一般法人74.7％、企業19.6％、NPO法人2.5％。文化会館は、一般法人58.8％、企業26.1％、NPO法人5.0％である。図書館の指定管理の特徴として、書店を中心にした企業が圧倒的であることがあげられる。因みに、米国図書館協会（ALA）は、指定管理について「営利企業が公共サービスを担うことには危機感があるが、市民活動の非営利団体が経営することには批判しない」と述べている。

指定管理者制度の賛否について、小牧市の住民投票を紹介する。市長の「ツタヤ新図書館建設設計計画」に対して反対論もあり、2015年10月4日に住民投票を行った。結果賛成2万4981票に対して、反対3万2352票があり小牧市は2021年3月に市直営図書館で新図書館がスタートする。一方では、岡崎市のように指定管理者制度により、利用者から図書館サービスへの信頼を得て一定の効果をあげているところもある。

6．令和は、職業訓練から教養教育へ

大学改革では、文科省が学生の出席を厳しく取るように指示があった。学生は、授業に出て、アルバイトをし、クラブ等に参加すれば、すでに時間がないため自宅では勉強をしなくなった。人間形成には自ら考え行動する、という裁量が必要だが、そのことを考える時間もないようである。企業は、大学に即戦力の人材を求めているが、学生には、大学在学中に、一般教養として自然科学、人文・社会科学、そしてAIに対応できる教養も習得して社会人としてスタートして欲しい。令和時代になり、さらに情報がオーバーフローしている時代になっているが、冷静に情報を知識にし、さらに知恵にしておくことが重要である。

図書館員は、プロフェッショナル・ライブラリアンからサブジェクト・ライブラリアンへ進化し、質を高めることが求められる。1970年頃に、米国の大学図書館の改革のひとつとして、次のようなことがいわれた。情報が増大していく時代に学生たちはその中の僅かなものを知識として獲得できるが、そこで重要なのは、大学教育を受ける学生たちが社会と自分について何を知ることができるのか、何を知らなければならないか、そして、それらのことを如何にして入手するのかを知ることが大事である。そのために大学図書館が中心になり、講義を中心とした既存の知識を教えるという教育は減少させ、その代わりとして生涯を通じての自己開発の技術や方法を、図書館を活用することで自主勉学し、その技術と方法を獲得させることにあると考える。

多額の学費を払って大学に通っても、これからの社会で必要な語学や情報資源や情報処理などの能力が十分身に付いていない学生も多い。大学図書館を充実させることで、大学図書館を利用して自分でものを考え、社会人として何が必要か、そして仕事のなかで情報をどのように獲得するかを学生のうちに身に付けて欲しい。少子化が進み大学経営が厳しさを増す中で、大学の生き残りの道は、大学図書館の充実にポイントがあるように思えてならない。

現在の大学図書館のシステムをここで紹介しておく。国立情報学研究所と国公私立大学図書館協力委員会の共同でJUSTICE（大学図書館コンソーシアム連合）というシステムを構築している。NACSIS（学術情報センター）を利用する各大学は参加しているが、2019年9月2日から慶應義塾大学メディアセンター（図書館）と早稲田大学図書館は、慶應・早稲田図書館システムの共同運用を始めた。このシステムは、イスラエルのEx Libris社のクラウド型の図書館システム「Alma」と検索システム「primo. VE」を導入して慶應・早稲田目録ユニットを構築した。このことで、1070万冊

に慶應・早稲田で同時検索が可能になった。共同運用のメリットは、①共同運用による利用者サービス・資料の充実。②システム共同運用による運用の安定化とコスト削減。③目録形式の標準化、目録作成のコストの削減。④慶應・早稲田間での知識・経験の共有、人的交流の推進が挙げられる。2大学だけがNACSISから抜けることになったが、NACSISの将来性を考えたとき、ひとつの方法とも考えられる。決してベストな方法だとは思わないが、各大学はNACSISに対する問題点を共有化している筈ではあるが、その先の動きが見えてこないことも確かである。

ここでは、日本の刑務所の矯正における教養教育の費用対効果を述べておく。2016年度法務省矯正局の調査によると日本の再犯罪率は48.7%である。日本の刑務所では、職業訓練、薬物指導が主である。職業訓練は特定の仕事の準備になるが、仕事がなくなると役に立たない。米国の刑務所では、受刑者向けの学士を取得できる大学教育プログラム（哲学、数学、いわゆるリベラルアーツ）があり、刑務所で教育をうけたことにより難しい問題を克服したという自信が持て、出所後の学業継続や就職も支援されている。卒業生のネットワークを通じて職を得ることもできる。服役中から自立の準備をできることから、再犯罪率は2%であり、日米の費用対効果を比べれば歴然としている。2015年9月の大学対抗討論対決（テーマ：米国の公立大学は不法滞在の生徒の入学を拒否できるようにすべきだ）でのBPI（ニューヨークの刑務所）チーム対ハーバード大学で、BPIチームが勝利した結果からも、物事を“理路整然”として語れる能力の高さが想像できる。日本の刑法犯の検挙者22万6379人のうち再犯者11万306人。また、検挙者は戦後最少である。新入所者の無職の割合65.1%、再犯者の無職の割合72.9%。職業訓練よりも教養教育を優先することが刑務所における矯正に役に立つことは明らかである。ゆっくりではあるが浸透していくに違いない。米国のように刑務所に大学教育プログラムをとまでは言わないが、早急にすべての刑務所に図書を収集して図書室を設置し図書館員（司書）を配置し、教養教育を始めることを提言していきたい。

7．ネットの進化と情報資源の温故知新

地方創生として、ユニークな公共図書館がある。岩手県柴波町図書館は、農業関連の書籍が充実している。併設する産地直売所に野菜の料理本を紹介するパネルを置いたり、農家との交流会を開いたりして農家支援も行われている。東京都荒川区「ゆいの森あらかわ」は、吉村昭記念文学館などとの複合施設として開館し、絵本館や屋内の遊び場を備えた子ど

も施設がある。東京都立多摩図書館は、「東京マガジンバンク」を開設して、１万8000誌の雑誌を集めており、特に創刊号をそろえた「創刊号コレクション」は人気である。東京都武蔵野市では、図書館複合施設「武蔵野プレイス」に建て替え、ボルダリング用の人工壁や、音楽、ダンスができるスタジオが４つもある。横浜市港北図書館では、昔話を掘り起こし、紙芝居にして上演している。岐阜市立中央図書館では、建築家伊東豊雄氏のデザインで複合施設を開設し、カフェ併設でドリンクを持ち込める。鹿児島県の出水市立図書館では、本の宅配サービスを2014年から開始している。これらは図書館を活用した「地域振興事業」である。図書館を核とした街づくりを地方創生に向けた「地方版総合戦略」に盛り込むことが必要である。

地方再生における図書館の役割のひとつとして郷土資料の掘り起こしも考えたい。いくつかの例を紹介する。台湾総督府の民政長官や東京市長などを務めた後藤新平（1857–1929）のデスマスクが台北市の寺で見つかり、本人のものと確認された。後藤新平記念館（岩手県奥羽市）は「後藤のデスマスクの所在が確認できたのは初めて。台湾で見つかったことも含め、貴重だ」という。後藤は1929年４月、東海道線の車中で倒れ、４月13日に死去。当時の新聞には、直後にデスマスクが作成されたことが報じられている。発見したのは、日本と台湾の友好親善を図る「台湾協会」評議員の金子展也さん。2006年、台湾の神社を調査していた際に、豊川稲荷が境内にまつられていた臨済護国禅寺（台北市）で偶然、デスマスクが収められた厨子を見つけた。扉には「伯爵 後藤新平閣下像」「献納 辜顕榮」などと記されていた。辜は、後藤の信任を得て成功した台湾の実業家。台湾でも行われた後藤の葬儀の葬儀委員にもなっていた。金子氏によると、デスマスクは複数作製されたという。後藤の子孫や、後藤が創設した東京市政調査会（現後藤・安田記念東京都市記念館）は昨年、金子さんが撮影した写真や動画などを見て、後藤本人のものと確認した。臨済護国禅寺は現在、デスマスクの一般公開はしていない。

家康が改修した石垣が発見された。家康が晩年に改修し、すでに発見されていた東西約61メートル、南北約68メートルの天守台の石垣の内側にあった。近くから、豊臣側の特徴を示す金箔瓦が約330点も見つかった。秀吉はかねての上洛要求に応じない関東の北条氏に対して総攻撃を仕掛ける。天正18年（1590）、豊臣秀吉が天下統一をかけた小田原攻めである。勝利を収めた秀吉は、駿府城を築いたばかりの家康を警戒し、江戸へ国替えさせ、家臣の中村一氏を新たな城主とした。豊臣の威光を示すべき、家康の城を作り直した。せめぎ合う両雄の姿が

生々しく浮かんでくる。家康の辞世「嬉しいと二度さめて一眠りうき世の夢は暁のそら」。

図書館は、コミュニティへの情報サービスの中心である。コミュニティライブラリーは、地域の動きが見える図書館、地域情報が役立つときはいつか、地域課題の解決につながるコミュニティ情報である。それには、統計資料など各種データによる地域社会の状況把握、住民アンケートなど、市民要望に関する行政資料や利用状況などによるニーズ把握、直接、市民や地位づくりにかかわっている関係者からの意見収集等が重要である。図書館は地域課題情報の集積地であり、図書館がつくりだす住民ネットワークを構築しなければならない。地域活性化などのコミュニティ施策がうまく運ばない理由は、住民側の情報不足、住民の不勉強、マスメディアによる偏重情報の悪影響等がある。図書館の情報提供の政策的重要性には、住民に魅力的な情報提供をして自己学習を促す、市場性の薄い情報を含めた公平公正な情報提供を行う、図書館員が住民や行政のさまざまな会合にできるだけ参加することが、公共図書館の令和元年と考える。

図書館の種類として不足しているものがある。地方議会図書室である。昭和22年（1947）に地方議会図書室の設置を決めたが、現在でもいまだに十分ではない。地方自治法第100条の第17項には図書室は政府の刊行物を集めること。第18項には、都道府県は、市町村の議会及び他の都道府県の議会に公報および刊行物を送付すること。第19項には、図書室を附置して、官報、公報及び刊行物を保管して置かなければならないこと。第20項には、図書室は、一般にこれを利用させることができること。以上が定められている。米国における“Information Citizen”とは、国民、市民が政治的、道徳的、社会学的、科学的に情報を積んだ市民である人たちは、このような情報を仕事に必要とするが、国民が政治的意志的に影響を及ぼすことができる民主主義においては、それは、自分でものを考え分析できるための重要かつ価値ある作業である。このことは、例えば、選挙権として１票を投じることでもある。

さいごに

「令和」における図書館の役割を考えてみる。第一に「人材の養成」である。図書館員なら、目の前で困っている人に手を差しのべずにいられない。なぜなら解決のノウハウを示す知恵を学び、実践しているからである。図書館の自由と民主主義は、今、大規模な変化を迎えている時かもしれない。小規模の図書館が、他の図書館と同様のものを目指して、果たして何か目的を達成できるのだろうか。現代社会は量より質の時代であるかもしれないが、同時に、専任であれば良

くて、非常勤がダメということでもない。図書館もしっかりしたサービスの理念を持てる図書館員が求められている。利用者を大切にするという意味では、利用者と図書館員が直結しているコミュニケーションを作ることにある。もっと言えば、図書館経営の成功は、図書館(員)、住民、そして行政が同じ方向へ向かうことにある。図書館員の量は無駄だとは思わないが、理念、信念がないと、利用者に対応できない。非常勤の立場だと、昇給のチャンスはないし図書館の仕事に対して動機づけが少ないかもしれない。それは本来決して望んでいることではないが、将来には確かに不安がある。基本的には、利用者は図書館を利用することで、平和で、喜びと、笑顔の生活を望んでいる。図書館員は本能的に、利用者の弱点を見抜き、サービスの方法を学んでいる。それは、司書の資格を取るときから会得し、情報に飢えている利用者に対してそのサービスの方法を学んでいる。図書館員の驚くべき勘と根気は、図書館の作業を進めるうえで、自信を得ていくのである。

図書館員は何人くらい必要なのか。人手不足の図書館はたくさんある。もし、人手が必要であれば、どのような目的に、いくらの人件費で、いつごろまでに、費用対効果と費用対効率、いわゆるパフォーマンスをあげていくのかは、明確な数字が必要である。米国の学校では、教育効果を出すには、教員の数を増やすより、質を高める方が経済効果は大きいと言われている。図書館員の数についても、「量よりは質」と言っている。図書館サービスの向上を考える際、「漠然とした目的」ではなく図書館の明確な目的を定め、そこに必要な質の高い図書館員を、適材、適所、適量を配置することである。

日本の図書館は、米国の発展を中心に技術革新してきている。利用者サービスについても米国のようなサービスに向上しなければならない。図書の選書において、図書館は“要求論”と“価値論”があることを利用者教育のなかで理解してもらうこともサービスを発展させるうえで重要である。

情報・知識を集めて、サービス方法論、図書館経営論を発展するには、やはり、日本独自の図書館のあり方も、改めて考える令和元年でもある。

参考文献

加藤好郎「豊橋に日本一の図書館を」『御成門新報』2014年11月3日

「豊橋市まちなか図書館（仮称）実施計画」（概要版）豊橋市都市計画部まちなか図書館整備推進室豊橋市教育委員会教育部図書館、2016年3月

“Guidelines for Library Services to Persons with Dementia,” *IFLA Professional Report*, No. 104, 2007.

Gates, Jean Key, *Introduction to Librarian*, New York: McGraw-Hill, 1968.